KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ポール・ヴァレリー著『レオナルド・ダ・ヴィンチ論』の翻訳(新訳)について

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部
	公開日: 2017-07-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 近藤, 愛紀
	メールアドレス:
	所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00007757

関西外国語大学 研究論集 第101号（2015年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.101（March 2015）

ポール・ヴァレリー著『レオナルド・ダ・ヴィンチ論』の翻訳(新訳)について

ポール・ヴァレリー著『レオナルド・ダ・ヴィンチ論』塚本昌則訳、筑摩書房、2013年。
ポール・ヴァレリー著『レオナルド・ダ・ヴィンチ論　全三篇』恒川邦夫・今井勉訳、平凡社、2013年。

近　藤　愛　紀

ポール・ヴァレリーの『レオナルド・ダ・ヴィンチ論』の翻訳が2013年に二つの出版社から相次いで刊行された。塚本昌則訳が９月10日に筑摩書房（「ちくま学芸文庫」）から、恒川邦夫・今井勉訳が12月２日に平凡社から上梓された。どちらも、ガリマール社の「プレイヤード叢書」に収められたテクスト（1957年刊行）を底本としている。ダ・ヴィンチ論は、ヴァレリーが自己の評論の形を確立したテクストで、ヴァレリーの思想を理解する上でたいへん重要な論考である。それは、「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」（初出1895年）、「覚書と余談」（初出1919年、平凡社版の訳では「注記と余談」）、「レオナルドと哲学者たち」（初出1928年）の三篇である。筑摩書房版では、その三篇に加えて、プレイヤード版に収められていない、ヴァレリーの評論集『私の見るところ』*Vues* 収録の「レオナルド・ダ・ヴィンチ」と「レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿集」が訳出されている。一方、平凡社版では、上記三篇の論考それぞれについて興味深い解説が付されている（「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」の生成、一九一九年のヴァレリー、ヴァレリーと<哲学>――カント読解を中心に）。さらに、同書に収められた参考図版（いろいろな型の飛行機械をはじめ、主にダ・ヴィンチのデッサンを収録）は24図あり、これらを見るのも読者の楽しみの一つである（筑摩書房版では、訳注の箇所に11の図版を載せている）。二つの訳書とも、詳細な注がつけられていて、本文を理解するのに大いに役立つ。両方の訳注を合わせてみることで、さらにヴァレリーの思考の足跡が浮かび上がる。

ダ・ヴィンチの手稿とデッサンに見られる力動的な精神活動に魅了されたヴァレリーは、そのメカニズムを解明するためにダ・ヴィンチの方法を再構築しようと試み、「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」として結実させる。1895年８月、ヴァレリー23歳の時に発表した論考である。これはいかにして独創的な芸術作品を生み出すことができるのかという、作品生成の秘密を探求する試みでもあった。上記の訳書の解説によれば、執筆に取りかかったのは1894年の12月中旬、出来上がったのは1895年の3月上旬である。1894年は『カイエ』（約半世紀にわたって書き続けられた思索ノート）の執筆を始めた年で、ヴァレリーにとって特筆すべき年である。思索

の断片やデッサン・図式・数式などを自在に配した『カイエ』のモデルはダ・ヴィンチの手稿であったとヴァレリーは語っている。

ヴァレリーは、モンペリエでの学生時代からその市立図書館で愛読していたダ・ヴィンチの手稿をモデルとして自己の思索を深めていたが、1894年のある日、彼は、ある文学サロンで友人を相手に強靭な論理を駆使して斬新なダ・ヴィンチ論を語った。参会者一同ヴァレリーの卓見に感銘を受けた。その内容が、サロンに出席していたレオン・ドーデから「ヌーヴェル・ルヴュ」誌の創設者ジュリエット・アダン夫人に伝えられ、ヴァレリーはダ・ヴィンチについての寄稿を求められる。要請に応じて、彼は、普通の芸術家論のようなダ・ヴィンチ論を書くのではなく、徹頭徹尾、知的にダ・ヴィンチの《方法》を論じようとした。ダ・ヴィンチが絵画から建築、さらには飛行機の設計にまで及ぶような多彩な分野で活動を展開できた根底には、ダ・ヴィンチ独自の《方法》が一貫して存在しているはずであるとヴァレリーは確信した。その《方法》を明らかにすることが、自己のダ・ヴィンチ論の目的であるとヴァレリーは考えたのである。

ヴァレリーのダ・ヴィンチ論は、ダ・ヴィンチに関わるさまざまなエピソードの集大成から成るのではなく、彼が外界の事象に対してどのような興味を持ち、どのような精神の働きによって創造に従事したか、という観点から叙述されている。ヴァレリーは、いかにして芸術作品が創られるかを理解したいと望み、それを創り出す精神の働きそのものを明らかにしようとした。こうしてヴァレリーは、ダ・ヴィンチのような「第一級の才能を持つ人物」はいかにして存在し得たのかという問いを提起して、ダ・ヴィンチの手記から読み取れる「第一級の才能を持つ人物」の思考のありようを、自分自身の内部に生起するいろいろな問題や心的事象についての知的な分析を手がかりにして思い描き、それによってダ・ヴィンチの内面の《方法》を再構築するという仕方で、ダ・ヴィンチ論を書こうと意図した。それは、伝記的な資料を用いず、ひたすらダ・ヴィンチの残した手稿と素描から抽出できる人物像を提示しようとしたヴァレリー二十代の意欲的な論考である。ヴァレリーによれば、第一級の精神の持ち主とは、「われわれには把握できない連続性の法則に従った事物の間に」明確にさまざまな関係を見出す最高の知能のことであり、思考をさまざまな心象（image）の連続性の構築という形に仕上げるのが、その方法であり行為である。ヴァレリーは、ダ・ヴィンチがさまざまな心象の成立を見極め、それらの心象の特性を確認して、そうしてそれらの心象の多様な組み合わせを試みてゆく過程を、最大限の想像力を働かせながら叙述してゆく。

ただ上記の「連続性」という用語には、ヴァレリー自身満足しておらず、1931年「覚書と余談」、「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」、「レオナルドと哲学者たち」をこの順序で一冊の本にまとめ『レオナルド・ダ・ヴィンチについての諸試論』としてサジテール社から出版した際、この用語に自ら注を施している。「連続性という語はまったく不適切である。適当な語を見つ

けることができず、その代わりにこの語を記したものと記憶している。/　私が言いたかったのはこういうことだ。我々の行為全体を〔統御する〕体系の中に転換したり翻訳したりすることができない事物の間に〔存する関係性〕ということである。/　この体系とは、すなわち、我々の力能の体系である」(平凡社版、恒川・今井訳、pp.20-21。〔　〕内の加筆・補足は訳者によるもの。/ は改行を示す)。「我々の力能」と訳されている箇所は、原文では nos pouvoirs である。筑摩書房版、塚本訳、p.21では「われわれの能力」と訳されている。また、「体系」については、「レオナルドと哲学者たち」の中に、「自分の体系――個人的な理解の秩序」（恒川・今井訳、p.237）の記述がある。

「レオナルド・ダ・ヴィンチ論」におけるヴァレリーの基本的な姿勢は、次の言葉に収斂されるであろう。「私の試みはある知的生活の細部についての一つの見解を提示することなのだ。どのような発見にも含まれている方法についての一つの示唆、想像し得る数多くの事物の中から選ばれた一つのもの、モデルを提示したいのである」（恒川・今井訳、p.14）。このように、ヴァレリーが目指したのは、レオナルドの精神の働きが内包される根源的な知的世界を再創造することであった。

さて、今回の訳書において、評者が一番興味を覚えたのは、平凡社版の解説である。三つの解説が付けられているので、順に見て行きたい。今井勉は、その解説「『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』の生成」で、フランス国立図書館所蔵の「序説」の草稿を精査して、「序説」冒頭部の草稿に二つの系列が存在することを確認し、それらが最終的に統合されて決定稿が成立したという事実を指摘している。草稿を具体的に検討することで、刊行テクストに至るまでのプロセスを解明し、ヴァレリーの思考の動きを浮き上がらせることに成功している。特に冒頭部の第一パラグラフに込めたヴァレリーの意図がいかなるものであったのかを、その推敲過程を丹念に追って究明している。

「覚書と余談」（「注記と余談」）は、1919年に「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」を単行本としてヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ社から刊行した際に、ヴァレリー自身が序文として付したものである。序文としては異例の長さで、いわば1919年におけるヴァレリーの「ダ・ヴィンチ論」とも言える。恒川邦夫はその解説で、1919年におけるヴァレリーを取り巻く時代状況、交友関係を詳述し、ヴァレリー自身の活動についても丁寧にわかりやすく報告している。特に、ヴァレリーと音楽家たちとの交流は興味深い。時代の先端を行く音楽家たちの演奏会へたびたび足を運んでいる。エリック・サティ、プーランク、ラヴェル、ドビュッシー、ストラヴィンスキーなどの名が見られる。とりわけ、ストラヴィンスキーとは親しくしていて、1939年にストラヴィンスキーがフランス語で書いた講演の原稿を見せて、ヴァレリーに意見を求めたという話が紹介されている。ヴァレリーが「言い回しや、語順などについていろいろアドヴァイスをしてくれた」上で、「講演の内容と様式に関しては文句なく賛同してくれた」というス

トラヴィンスキーの回想が載せられている。恒川は、「ヴァレリーと音楽の関係は、本質的には、詩と音楽の関係である。いかに詩が音楽の純粋さと自由さ―普遍性―に比肩する境地に達し得るかという問題である」（pp.221-222）と詩学の観点から説明しているが、ヴァレリーは純粋に音楽が好きで、音の響きを楽しんでいたと評者には思われる。

「レオナルドと哲学者たち」はヴァレリーが哲学についてどのように考えていたかをダ・ヴィンチに託して叙述したもので、そこでは特に≪美≫に関するヴァレリー独特の思索が提示されている。恒川による解説は、「ヴァレリーと<哲学>――カント読解を中心に」と題され、カントの哲学をヴァレリーがどのように受容し、反応したかを、ヴァレリーが参考にした哲学者たちの著作のエッセンスを紹介することで、浮き彫りにしている。そこには、ウロンスキー、ショーペンハウエル、ランゲ、コルバシーヌの名が挙げられ、彼らのカントをめぐる学説とそれをヴァレリーがどう取り入れたかが綿密に検討されている。さらにヴァレリーが直接カントの著作を読んで、どう考えたかを、『カイエ』に記されたカントに関する叙述を検討することで明らかにしている。

「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」は二十代のヴァレリーの気負いがやや感じられるが、その後も続行される精神のメカニズムの探究を方向づけたものとして、壮年期に書かれた「覚書と余談」、「レオナルドと哲学者たち」とともに、綿密に読解されるべきテクストである。恒川がその「あとがき」で述べているように「二一世紀になってほどなく、ヴァレリーの書き物が公的分野に入った」。「版権が切れたことにより、これまで筑摩書房の『全集』版が主役を演じてきた時代に一区切りがつけられ」、「複数の出版社から作品の新訳が出始めた」。その中の一つが今回評者の取り上げた『レオナルド・ダ・ヴィンチ論』の翻訳書である。

ここでは、ちくま学芸文庫の訳(塚本訳)と平凡社版の訳（恒川・今井訳）で異なっている箇所を三篇の中から一箇所ずつ選んで比較することで、ヴァレリーの意図がどこにあったのかを論述して、問題点を指摘したい。それは、ヴァレリーの思想を理解する一助となるだろう。

(1)「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」

「人間はこのようにさまざまな視像（vision）を獲得していて、その視像の力が彼の力となる。自己の歴史を、彼はそれらの視像に関係づける。それらの視像は、彼の歴史が展開される幾何学的場なのだ。」（塚本訳、p.20、下線は評者）。

「人間はそうして様々な視力を備えており、その力が人間の力となる。人はそこに自分の歴史を関連づける。視力はその人の歴史の軌跡なのである。」（恒川・今井訳、p.19、下線は評者）。

下線の箇所は、原文では le lieu géométrique である。文字通りには、幾何学的な場であるが、これは熟語で軌跡を意味する。ある物がたどった動きの跡、またそれを捉える精神がたどった跡を表していると思われるので、恒川・今井訳の方が文脈に合っていて

分かりやすい。

(2)「覚書と余談」(「注記と余談」)

「資料はわれわれに、慣例も例外もおかまいなしに、行きあたりばったりに教える。年代記作者でさえ、その時代の奇妙な出来事の数々を、好んで記録にとどめようとする。だが、ある時代、ある人物について真実であることのすべてが、その時代、その人物をより深く知ることに役立つとはかぎらない。」(塚本訳、p.99、下線は評者)。

「資料は我々に規則と例外を、きちんと分別することなく、教える。年代記作者ですら、好んで、自分の時代の特異点を我々に伝える。しかし、ある時代、ある人物に関する真実なるものは、すべて、必ずしもそれらをよりよく知るための資料にはならない。」(恒川訳、pp.157-158、下線は評者)。

問題は原文の les singularités をどう解釈するかである。「奇抜な行為とか奇妙な事柄」のことだと思われる。慣例と例外が論じられているのだから、その時代においても異例であることを年代記作者は書き留めるとのことであろう。だから、それを知っても必ずしもその時代の本質、その人物の本質を知ることにはならず、例外的な一面を見るだけに過ぎなくなるおそれがある。以上のことを鑑みると、塚本訳の方がこの箇所については的確だと言える。恒川訳の「自分の時代の特異点」という言い方は、曖昧さが残る。「自分の時代の特異な出来事」とすれば良いだろうか。

上記の箇所に続けてヴァレリーは次のように述べる。「さまざまな外観の正確な総和に、ぴったり一致するような人などいない。われわれは誰でもみんな、自分らしくないことを言ったり、したりした経験があるのではなかろうか。時には誰かの真似をして、時には言い違いによって、――あるいはその場のはずみで――あるいはいつもの自分であることにいい加減うんざりしたというだけで、一時、別人になってしまう。夕食のとき、誰かがわれわれを素描し、その紙片が、学識豊かなひとびとであふれている後世に残ったとしよう。するとわれわれは、文学というものが存続するあいだ、永遠に愛想の良い人物になってしまうのだ。しかめ面をしている瞬間を、誰かが写真に撮ってしまえば、反論できない資料となる。だがそれを、撮影された人物の友人たちに見せて御覧なさい。彼らには誰だか分からないだろう。」(評者、試訳)。

レオナルドが、ある時偶々取った言動、振る舞いをたとえ知ったとしても、彼の本質を解明することにはつながらないとヴァレリーは言いたいのであろう。

(3)「レオナルドと哲学者たち」

「精神の歴史において、この＜理想＞の導入ほど注目すべき出来事はほとんどなく、ここにこそすぐれたヨーロッパ的事実を認めることができる。人びとにおける理想の衰弱は、ヨーロッパの典型的美徳の衰弱と一致するのである。」(塚本訳、p.163)。

「精神の歴史において＜観念＞の導入ほど注目すべき出来事は少ない。そこにはすぐれてヨーロッパ的な事実を見ることができる。人々の精神における観念の衰弱は、ヨーロッパ特有の美徳の衰退と軌を一にしている。」(恒川・今井訳、p.241)。

ここでは、真・善・美のことが話題になっているので、理想という訳語がふさわしいと思われる。原文は idéal の複数形の idéaux である。Idéaux と頭文字が大文字で表記されており、訳書では＜　＞で括られている。それは、認識上の真と、倫理・道徳上の善と、審美・芸術上の美で、人間にとって最高の理想とされる三つの価値概念を指している。

以上、三篇のテクストから一箇所ずつ選んで、訳を対照して検討した。塚本訳も恒川・今井訳もよく考えられた訳であるが、若干、原文の意味を伝えきれていない箇所が見られる。

そうした点があるものの、両訳書とも解説と訳注において、ヴァレリーが「レオナルド・ダ・ヴィンチ論」執筆に至った状況とその時代背景を詳述し、作品の成立過程をしっかりと考察している。また、ダ・ヴィンチの手稿の他に、ヴァレリーが参照したと思われる文献・資料を特定し、本文の文脈に沿って、それがどのように摂取されているかを丹念に分析している。「レオナルド・ダ・ヴィンチ論」の少なからぬページは、それらのテクストとの共振関係あるいは葛藤状態のなかで作成されたのである。

その結果とも言えるが、両訳書とも参考文献のリストが充実していて、研究の指針を与えてくれる。さらに平凡社版には、ヴァレリーのテクストを理解するための鍵となる人名索引と事項索引が付されていて有意義である。筑摩版も索引が付け加えられれば、さらに良くなると思われる。

今後も、作品の生成過程を解明しヴァレリーの思考のプロセスを探求するために、草稿の精査が一層進むであろう。そうした最新の研究成果を踏まえた、ヴァレリーの他の作品の新訳の刊行が期待される。これは彼の思想を解明するのに、たいへん好ましい状況であり、研究の環境が一層充実するのは喜ばしい。上記の訳書がその先駆けになったことは確かである。

(こんどう・まなき　英語国際学部教授)